

令和 4 年 6 月 26 日現在

機関番号：23603

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K14100

研究課題名(和文) 多文化共生の実現に向けた人間性形成に関する一考察 ヘルダーを手がかりに

研究課題名(英文) A Consideration of Humanity Formation for the Realization of Multicultural coexistence - Based on Herder's Philosophy -

研究代表者

寺川 直樹 (Terakawa, Naoki)

長野県立大学・健康発達学部・講師

研究者番号：50801990

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、ヘルダーの人間性形成思想をもとに、以下の3点を明らかにした。第一に、(普遍的)人間性は個性と対立しながらも相即的關係にある。こうした観点をふまえることではじめて、多文化共生が本来の意味で実現可能となる。第二に、その実現のためには、感情移入・共感が重要な役割を担っている。そして第三に、今日の多文化共生論およびその実現に向けた現代日本の道徳教育は、ヘルダーの人間性形成思想によって理論的に基礎づけられることでその真価を発揮しうる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヘルダーの人間性形成思想のうちに多文化共生論や感情移入(共感)論の萌芽を見いだす先行研究は確かに存在する。しかしその両者を、さらには道徳教育をも結びつけて体系化しその現代的意義について問う研究は存在しなかった。そのため、こうした視点に立脚して考察を進めた点に本研究の学術的意義がある。また、その社会的意義は、現代の多文化共生論およびその実現に向けた現代日本の道徳教育をヘルダーの人間性形成思想の観点から理論的に基礎づけた点にある。

研究成果の概要(英文)：Refer to Herder's idea of humanity formation, the author suggested the following opinions: First, humanity(universality) and individuality is complementary to each other though they are opposed. Only this perspective makes the multicultural coexistence possible. Second, empathy(in German; Einfuehlung) leads to the realization of it. Finally, the modern multiculturalism and moral education, which makes it realized, in Japan need to be grounded by the above ideas.

研究分野：教育哲学

キーワード：ヘルダー 人間形成 人間性 多文化共生 自己(感情)移入 共感 道徳教育

1. 研究開始当初の背景

価値の多様化・相対化が進展する今日、多文化共生の実現が喫緊の課題として要請されている。そして、その実現に向けた方途の一つであり、その中でも特に重要な役割を果たすものこそ、道徳教育である。しかし、その多文化共生、換言すれば諸文化・諸価値の相互承認 (Taylor 1994=1996:86-101) とはいかにして可能となるのか。それは、共生する諸文化およびそこに属する人々が何らかの共通点、しかもそれは万人に当てはまるという意味で普遍的な共通点を有することによるのではないだろうか。そしてその(普遍的)共通点こそ、われわれが人間性と称するものである。それにくわえて、「豊かな人間性……を備えた人間の育成を期する」という文言が改正教育基本法に明文化されたことをふまえるならば、人間性形成は(道徳)教育の目的であるとともに、多文化共生の実現にとっても重要な契機となると言える。

教育学分野においては、ブレツィンカ(1986=1992)以降、確かに価値多様化(多文化共生)時代における(道徳)教育の問題について度々考察されてきた。しかし、人間性形成を通じた多文化共生の実現可能性に関する研究がなされてきたとは言い難い。こうした現状をふまえると、多文化共生の成立根拠であるところの、他文化およびそこに属する人々の間の(普遍的)共通点たる人間性およびその形成方法、ならびに人間性形成を通じた多文化共生の実現可能性を追究することが肝要である。したがって、本研究の問いは、多文化共生の成立根拠であるところの、他文化およびそこに属する人々の間の(普遍的)共通点たる人間性の形成は如何にして可能となるのか、ということになる。

2. 研究の目的

上記の問いをふまえ、(1)多文化共生の成立根拠であるところの、他文化およびそこに属する人々の間の(普遍的)共通点という視点から人間性を考究し、(2)その形成方法にくわえ、(3)その人間性形成を通じた多文化共生の実現可能性について検討することが本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究では、18世紀ドイツの思想家ヘルダーの人間性形成思想を手がかりとしながら、上記目的に照らして考察を進めてきた。その理由としては、彼が教育学的視点から人間性形成のあり方を先駆的に考究するとともに、多文化共生論の草分けとして現代の多文化共生論にもその理念が継承されている(たとえば、Taylor 1994=1996:44-46)など、18世紀の思想家とはいえ、今日においてもなおその影響力は多方面に渡る(Greif, Heinz, Clairmont 2016:669-748)ことが挙げられる。

以上の点を鑑み、本研究の遂行に際し、以下の3つの課題を設定した。具体的には、①ヘルダーの人間性形成思想にみられる〈普遍-特殊〉関係の〈人間性-個性〉関係への応用(寺川 2020, Terakawa 2021a)、②課題①をふまえた自己(感情)移入・共感といったヘルダーの他者理解に関する諸原理の考察(寺川 2021b, 2022a)、そして③課題①、②の研究成果をもとにした、ヘルダーの人間性形成思想の多文化共生およびその実現に向けた道徳教育への応用可能性についての検討(寺川 2022b)、である。

4. 研究成果

(1)課題①については、〈普遍-特殊〉の「対立の一致」(coincidentia oppositorum)関係をヘルダーの認識論・存在論の視点から考察し、その内容をふまえて、彼の歴史哲学をもとに「普遍的なもの」たる人間性と「特殊なもの」たる個性との関係について検討した(寺川 2020)。

まずは、ヘルダー(1799=1998)をもとに、〈普遍-特殊〉の「対立の一致」関係を認識論の視点から考察した。とりわけ特殊化をふまえた普遍化、および普遍化をふまえた特殊化という理性の両作用の螺旋状的な認識の深化により、〈普遍-特殊〉の「対立の一致」関係の「生動的な」認識へと至ることが、人間形成の一過程であることを確認した。また、ヘルダー(1769a=1987, 1769b=1987, 1787=1994)を手がかりとして、〈普遍-特殊〉の「対立の一致」関係を存在論の視点から分析した。その内容を要約するに、「普遍的なもの」たる根源的モナドの変状によって「特殊なもの」となる派生的モナドは、その根源的モナドすなわち「力としての神」を内在するという、〈普遍-特殊〉という対立が一致(均衡)した現存とみなしうるようになった。

以上の内容をふまえて、ヘルダー(1774=1994, 1784-91=1989)にもとづいて、「普遍的なもの」たる人間性(Humanität)と「特殊なもの」たる個性との関係について検討した。先ほどの見解になぞらえて言えば、「特殊なもの」として個性的存在たる個人および諸民族は、「普遍的なもの」たる人間性の歴史的風土的影響による変状を通じてその現存を享受するが、彼らは常に「普遍的なもの」たる人間性を有するがゆえに、〈人間性-個性〉の対立が一致(均衡)した現存として存在するのである。このように、ヘルダーの思想を手がかりとするならば、多文化共生を実現するためには個性的な多文化に通底する「普遍的なもの」、すなわち人間性とその前提となっている。そしてその際肝要なのは、多文化共生の実現に向けて「普遍的なもの」たる人間性のう

ちに「特殊なもの」たる個性を、そして個性のうちに人間性を見いだすこと、すなわち人間性とは何かと問い、それを育む人間性形成、より正確に言えば「対立の一致」関係にある〈人間性 - 個性〉の動態的認識過程なのである。

こうした見解に基づくと、「1. 研究開始当初の背景」で述べたごとく、多文化共生を実現するためには、個性的な多文化に通底する共通点、すなわち人間性がある前提となっていると言えよう。そして、その際肝要なのは、人間性と個性との関係を「対立の一致」という観点から捉え返すということではないだろうか。ただし、ここで注意すべきは、ヘルダーの「対立の一致」論が「対立」を対立としてそのまま保持しながらも、「均衡」としての「一致」へ至らしめようと試みている点である（寺川 2018）。この「対立の一致」という過程こそが、先述した〈普遍 - 特殊〉の「対立の一致」関係の「生動的な」認識過程、すなわち人間形成の過程の一つなのである。それゆえ、多文化共生の実現に向けて、「普遍的なもの」たる人間性のうちに「特殊なもの」たる個性を、そして個性のうちに人間性を見いだすことが必要なのであり、それこそが人間性とは何かと問い、それを育む人間性形成、より正確に言えば、「対立の一致」関係にある〈人間性 - 個性〉形成なのである。その際、多様な諸文化は人間性の名のもとに一元化されるわけではなく、その多様性（個性）を保持しながらも均衡、すなわち一致へと至るのである。この一致こそが、個性と対置されることの「人間性／人類」（Menschheit）という規範性を超え、その個性と人間性の「対立の一致」という名の均衡としてのフマニテートなのである。このような視座に依って立つことでこそ、初めて多文化共生が実現しうるのではないだろうか。

なお、以上の見解をふまえて、寺川（2021a）では、ヘルダーの人間性形成思想をベルジャーエフの人格形成論と比較考察した。

(2) 課題②では、その〈人間性 - 個性〉の動態的認識過程を基礎づける方法論として、彼の自己（感情）移入（Sichhineinfühlen; Einfühlung）および共感（Sympathie）概念に着目した（寺川 2021b）。

まず、ヘルダー（1769c=1994, 1778a=1994）をもとに、その自己移入論の基盤をなす「触覚」概念について検討した。すなわち、触覚とは「相互に内部へと入り込む（in einander）ものとして捉える感覚」（Herder 1778a=1994:257）にして、「われわれ人間の自我全体を、それに限なく触れたところの形態へと移入すること」（Herder 1778a=1994:297）である。これをふまえて、ヘルダー（1778b=1994）を手がかりとして、自己移入論の方法論的基盤について考察するとともに、ヘルダー（1774=1994, 1784-91=1989, 1793-97=1991）の歴史哲学的人間形成論において自己移入（共感）が具体的にどのような機能を果たしているのかについて吟味した。結論としては、ヘルダーの自己移入論には、類比・想像に基づく自己移入という拡張と先入観という収縮との動態的な緊張関係を通じて、「おのれの自我の著しい拡張」（Cassirer 1957=1996:286）としての自己移入から出発し、「具体的な人間の人間性」（Herder 1784-91=2002:1138）に直に触れながら公平性（フマニテート）を実現し、それによって自己移入を、「〈主体 - 客体〉という統一性」（Piirimäe 2020:9）ないしは「対立の一致」へと達する「没我の認識」（酒田 2017:476）として確証するという意味での人間形成の過程が内在していることを指摘した。

以上の見解が現代日本の道徳教育に与える示唆としては、「読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」において自己（感情）移入を行う際には、生徒が具体的にその登場人物に直接ふれあうという（疑似）体験が重要であること、またヘルダーも主張するように、自己意識の醸成から（身近な）他者への共感、そして（普遍的な）公平性へと自己（感情）移入を深めていくプロセスは、道徳科の視点 A「主として自分自身に関すること」から視点 B「主として人との関わりに関すること」、そして視点 C「主として集団や社会との関わりに関すること」へと、児童生徒にとっての対象の広がりによって内容項目を配列する学習指導要領の見解（文部科学省 2017a:5, 文部科学省 2017b:5）とも合致しており、その意味でも自己（感情）移入が道徳教育の要となること、が挙げられる。

なお、本研究の補論として、主にヘルダー（1800=1998）を手がかりに以下の点を解明した（寺川 2022a）。まずは、人間における共感の最高形式たる「共同知性」（Mitverstand）（Herder 1800=1998:698）、すなわち「知性に基づく共感」を人間は神的な普遍知性へと完成させることは不可能であるが、そこへと向けて自らの共感の形式を継続的に形成することが重要であることである。そして、それとともに想像力に基づく「投射的共感」（projizierte Sympathie）（Heinz 2020:68）、さらには感覚・感性に基づく「同情」（Mitleid）（Heinz 2020:65）との協働によってそれを補完するのが肝要だということである。また、ヘルダーの共感（自己（感情）移入）論の対象が他者に留まらず、自然をもその視野に包摂していることをふまえ、自然への共感の可能性についても考究した。そしてその内容をもとに、道徳科の内容に関する視点 D「主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること」の取り扱いにおける方法論的基礎づけを試みた。

(3) 以上の研究成果をふまえながら、ヘルダーの人間性形成思想の多文化共生およびその実現に向けた道徳教育への応用可能性について検討したのが課題③である（寺川 2022b）。

まず、多文化共生を批判的に考察する国内外の先行研究を整理した。わけでも、テイラー（1994=1996:93）が多文化共生、すなわち諸文化・諸価値の相互承認を可能にする縁として引き合いに出すのが、ガダマー（1960=2008:479ff.）の「地平の融合」である。この地平〔の〕融合と並んで注目すべきガダマーの基本概念として、「解釈学的循環」（Gadamer 1960=2008:421ff.）が挙げ

られるが、この解釈学的循環、さらには地平 [の] 融合の概念は、ヘルダーの自己（感情）移入論にも通ずることが指摘されている（濱田 2014:257）。事実、寺川（2021b, 2022a）の考察と照らし合わせてみても、濱田（2014）の指摘は妥当であり、ここにヘルダーとテイラーの接点、さらにはヘルダーの自己（感情）移入論が現代においても通用することがうかがい知れる。また、そのテイラー（1994=1996）に対するロックフェラー（1994=1996）の応答のうちには、人間性と個性の「対立の一致」関係（寺川 2020）を想起させる思索が見受けられる。さらに、このロックフェラー（1994=1996）の思索を敷衍したものと位置づけられる花崎（2001）の見解は、他者理解の前提として「(推量的) 想像力」(久重 1988) や「三人称的客観」論（森 1977）、さらには「憐れみ(ピティエ)」を引合いに出している点で、ヘルダーの自己（感情）移入論（拙稿 2021b, 2022a）や「対立の一致」論（拙稿 2018）と接点を有する。

また小・中学校『学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』を中心に、現代日本の道徳教育において多文化共生がどのように位置づけられているのかについても吟味した。その内容を総括するに、自己理解（視点 A の「[向上心、] 個性の伸長」、視点 C の「[伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度]」、[郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度] および「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」）をふまえつつ自己（感情）移入を行い、それによって視点 B の「[親切、] 思いやり [、感謝]」「相互理解、寛容」や視点 C の「公正、公平、社会正義」「国際理解、国際（親善）[貢献]」、さらには視点 D の「生命の尊さ」「自然愛護」といった道徳的価値（く）については小学校のみの規定、[] については中学校のみの規定）の理解およびそれを基調とした「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度」の育成が可能となることを明らかにした。その上で、ヘルダーの自己（感情）移入論（寺川 2021b, 2022a）によってその内容を基礎づけるとともに、その具体化および深化が可能であることを指摘した。

(4) ヘルダーの人間性形成思想のうちに多文化共生論や自己（感情）移入（共感）論の萌芽を見いだす先行研究は、確かに存在する。しかしその両者を、さらには道徳教育（人間性形成）をも結びつけて体系化しその現代的意義について問う研究は存在しなかった。そのため、ヘルダーを手がかりとして多文化共生論・自己（感情）移入（共感）論・道徳教育（人間性形成）が密接に関連していることを明らかにするとともに、その理論的基盤となるヘルダーの人間性形成思想には現代的意義があることを指摘したことが、本研究から得られた成果の国内外における位置づけであり、そのインパクトは、現代の多文化共生論およびその実現に向けた現代日本の道徳教育をヘルダーの人間性形成思想の観点から理論的に基礎づけた点にある。

(5) ヘルダーの人間性形成思想は 18 世紀ドイツというニヒリズム以前の思索であることをふまえるに、その現代的意義があるといえども、やはり限界があることも否めない。そこで、今後の展望としては、ヘルダーの人間性形成思想の延長線上に位置づけることができるニヒリズム以降の思索、具体的にはフランス人格主義とその周辺（ベルジャーエフ、ムーニエ、Th. シャルダン、ブロンデルら）や現象学的自己（感情）移入（共感）論（Th. リップス、フッサール、シェーラー、E. シュタイン、H. シュミッツら）に着目するとともに、日本人の道徳（教育）観の基底をなす仏教をはじめとした東洋思想も射程に入れながら、多文化共生およびその実現に向けた道徳教育のあり方を考究していく。

〈引用文献〉

1. Taylor, C. (1994=1996)「承認をめぐる政治」佐々木毅・辻康夫訳、エイミー・ガットマン編『マルチカルチュラリズム』佐々木毅・辻康夫・向山恭一訳、岩波書店、37-110 頁
2. Brezinka, W. (1986=1992)『価値多様化時代の教育』岡田渥美・山崎高哉監訳、玉川大学出版部
3. Greif, S., Heinz, M., Clairmont., H. (Hg.) (2016): Herder Handbuch, Paderborn
4. 寺川直樹 (2020)「人間性と個性—ヘルダーの人間形成論を手がかりに—」『プロテウス』第 19 号、59-75 頁
5. Terakawa Naoki (2021a): A Consideration of Berdyaev's Theory of Personality Development—Comparing to the idea of Humanity Formation by Herder—, 『こども学研究』第 3 号、1-21 頁
6. 寺川直樹 (2021b)「ヘルダーの自己移入論—人間形成の視点から—」『プロテウス』第 20 号、1-18 頁
7. 寺川直樹 (2022a)「自然への共感に向けた一考察—ヘルダーの人間形成論を手がかりに—」『プロテウス』第 21 号、1-15 頁
8. 寺川直樹 (2022b)「多文化共生およびその実現に向けた道徳教育に関する一試論—ヘルダーの人間性形成思想を手がかりに—」『こども学研究』第 4 号、61-83 頁
9. Herder, J. G. (1799=1998): Metakritik zur Kritik der reinen Vernunft, In: Ders., Werke in zehn Bänden, Bd. VIII, hrsg. von H. D. Irmscher, Frankfurt a. M., S. 303-640
10. Herder, J. G. (1769a=1987): Über Leibnitzens Grundsätze von der Natur und Gnade,

- In: Ders., Werke, Bd. II, hrsg. von W. Pross, München, S.49-51
11. Herder, J. G. (1769b=1987): Grundsätze der Philosophie, In: Ders., Werke, Bd. II, hrsg. von von W. Pross, München, S. 2-56
 12. Herder, J. G. (1787=1994): Gott. Einige Gespräche, In: Ders., Werke in zehn Bänden, Bd. IV, hrsg. von J. Brummack u. M. Bollacher, Frankfurt a. M., S.679-794
 13. Herder, J. G. (1774=1994): Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit, In: Ders., Werke in zehn Bänden, Bd. IV, hrsg. von J. Brummack u. M. Bollacher, Frankfurt a. M., S.9-107
 14. Herder, J. G. (1784-91=1989): Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit, In: Ders., Werke in zehn Bänden, Bd. VI, hrsg. von M. Bollacher, Frankfurt a. M.
 15. 寺川直樹 (2018)「ビルドゥングの原理としての「対立の一致」—ヘルダーを手がかりに—」『プロテウス』第18号、89-104頁
 16. Herder, J. G. (1769c=1994): Zum Sinn des Gefühls, In: Ders., Werke in zehn Bänden, Bd. IV, hrsg. von J. Brummack u. M. Bollacher, Frankfurt a. M., S.233-242
 17. Herder, J. G. (1778a=1994): Plastik, In: Ders., Werke in zehn Bänden, Bd. IV, hrsg. von J. Brummack u. M. Bollacher, Frankfurt a. M., S.243-326
 18. Herder, J. G. (1778b=1994): Vom Erkennen und Empfinden der menschlichen Seele, In: Ders., Werke in zehn Bänden, Bd. IV, hrsg. von J. Brummack u. M. Bollacher, Frankfurt a. M., S.327-394
 19. Herder, J. G. (1793-97=1991): Briefe zu Beförderung der Humanität, In: Ders., Werke in zehn Bänden, Bd. VII, hrsg. von H. D. Irmscher, Frankfurt a. M.
 20. Cassirer, E. (1957=1996)『認識問題4 近代の哲学と科学における』山本義隆・村岡晋一共訳、みすず書房
 21. Herder, J. G. (1784-91=2002): Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit, In: Ders., Werke, Bd. III/I, hrsg. von von W. Pross, München
 22. Piirimäe, E. (2020): Introduction: Historicism, Stoicism and Contemporary Perspectives, In: Herder on Empathy and Sympathy. Einfühlung und Sympathie im Denken Herders, hrsg. von E. Piirimäe, L. Lukas, J. Schmidt, Leiden, S.1-33
 23. 酒田健一 (2017)「ヘルダーの遺産、見送る者と引き継ぐ者」同『フリードリヒ・シュレーゲルの「生の哲学」の諸相』御茶ノ水書房、451-478頁
 24. Herder, J. G. (1800=1998): Kalligone, In: Ders., Werke in zehn Bänden, Bd. VIII, hrsg. von H. D. Irmscher, Frankfurt a. M., S.641-964
 25. Heinz, M. (2020): Sympathie. Zur Palingenesie stoischen Denkens in Herders Kalligone, In: Herder on Empathy and Sympathy. Einfühlung und Sympathie im Denken Herders, hrsg. von E. Piirimäe, L. Lukas, J. Schmidt, Leiden, S.50-73.
 26. Gadamer, H.-G. (1960=2008)『真理と方法Ⅱ』轡田収・巻田悦郎訳、法政大学出版局
 27. 濱田真 (2014)『ヘルダーのビルドゥング思想』鳥影社
 28. Rockefeller, S. C. (1994=1996)「自由主義と承認をめぐる政治」佐々木毅・向山恭一訳、エイミー・ガットマン編『マルチカルチュラルリズム』佐々木毅・辻康夫・向山恭一訳、岩波書店、128-144頁
 29. 花崎皋平 (2001)『[増補] アイデンティティと共生の哲学』平凡社
 30. 久重忠夫 (1988)『罪悪感の現象学—「受苦の倫理学」序説』弘文堂
 31. 森有正 (1977)『経験と思想』岩波書店
 32. 文部科学省 (2017a)『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別の教科 道徳編』
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387017_012.pdf (2022年6月25日閲覧)
 33. 文部科学省 (2017b)『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 特別の教科 道徳編』
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_011.pdf (2022年6月25日閲覧)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 寺川直樹	4. 巻 4
2. 論文標題 多文化共生およびその実現に向けた道德教育に関する一試論 - ヘルダーの人間性形成思想を手がかりに -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 こども学研究	6. 最初と最後の頁 61-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 寺川直樹	4. 巻 21
2. 論文標題 自然への共感に向けた一考察 - ヘルダーの人間形成論を手がかりに -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 プロテウス - 自然と形成 -	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 寺川直樹	4. 巻 20
2. 論文標題 ヘルダーの自己移入論 - 人間形成の視点から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 プロテウス - 自然と形成 -	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Naoki TERAKAWA	4. 巻 3
2. 論文標題 A Consideration of Berdyaev's Theory of Personality Development - Comparing to the idea of Humanity Formation by Herder -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 こども学研究	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 寺川直樹	4. 巻 19
2. 論文標題 人間性と個性 ヘルダーの人間形成論を手がかりに	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 プロテウス	6. 最初と最後の頁 59-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------